

目の見えない人にとって 必要のない情報なんてない



実家は東京の目白です。家の近くに盲学校がありました。母が目の不自由な人に道案内をしていたこともあって、幼いころから自分も何かお手伝いできることはないかと考えていました。

結婚後、夫の仕事の関係で安城で暮らすことになり、そこで社会福祉協議会主催の朗読ボランティア養成講座を受けたことが契機となりました。それ以後の数年間は安城市内の音訳ボランティアをしている団体の立ち上げにもかかわり、広報紙の音訳というものを手がけるようになりました。

現在は豊橋にある点字図書館「明生会館」に所属して、図書の音訳や朗読奉仕、またボランティアの養成講座の講師も務めております。



よし だ
吉田ふさ子さん
(今池町・63歳・音訳ボランティア)

第35回記念「朗読録音奉仕者感謝の集い」朗読・全国表彰

主な音訳図書の分野 医学・工学・小説・随筆

特に好評な作品 宇宙皇子、竜の枢など

音訳は、市の広報紙によって、90分テープ1巻に収まるときもあれば、足りないときもありますね。普通の1冊の本であれば、録音するのに90分テープ5巻が必要です。ただし、蔵書となると難しいですね。私一人ではどんなに頑張っても1年に4冊の本を音訳するのが精一杯です。著作権のことやら手続き上のこともありますけど。こちらもただ朗読すればいいというものではありません。音訳する者の感情が入ると、利用者にとってはそれが邪魔になることもあるし、著者に見えればニュアンスが少し違っても自分の作品としては受け入れられないとか。それなりに勉強や下調べもしますよ。裏打ちのない物を自分で一つの作品にする

筆者のつぶやき

国語が得意ではなかった中学のころ、先生に「朗読の才能がある」と励まされ、今日にまで至ったそうです。生徒に温かい「目」をむける教師がいて、今また吉田さんは目の見えない人の「目」となって活躍しています。そして新たな「芽」を育てることも大切に忘れたい。奉仕の心は見返りを求めないというけれど…どこかでたくさんの方が「ありがとう」と感謝しているのですね。

ことはできませんから。

定期的に勉強会もしていますよ。講座が終わってもやはり分からないことや壁にぶつかります。それを早く乗り越えて一人前のボランティアとして活躍できるように、後進に頑張ってもらいたいです。

目の見えない人にとって必要のない情報なんてないですよ。何が必要で何が足りないかは、聞いた本人が決めることです。だからできるだけ多くのことを音訳して聞いていただきたい、そう思っ日々続けてきました。長く続けることは苦ではありません。いったん途切れてまた再開しようとするのもっと大変ではないかしら。私は23年程前、朗読ボランティアの受講をしたとき、これをライフワークにする決めました。これからも健康である限りずっと続けるつもりです。